

目次

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| 凡例                               | 5  |
| はじめに                             | 6  |
| I 和歌と引歌・歌語表現の独自性                 | 11 |
| 第一章 〈父の離京〉における贈答歌——和歌の齟齬と散文表現——  | 14 |
| 一、〈父の離京〉と散文表現 14                 |    |
| 二、倫寧の歌 16                        |    |
| 三、兼家の歌 22                        |    |
| 四、贈答歌の断絶と散文表現 24                 |    |
| 五、多様な散文表現へ 27                    |    |
| 第二章 上巻の道綱母長歌の構造——書陵部本を活かした読解から—— | 29 |
| 一、道綱母長歌の読み直し 29                  |    |
| 二、「宿世絶ゆ」か「するを絶ゆ」か 30             |    |
| 三、兼家への恋情表現 33                    |    |
| 四、兼家の長歌 36                       |    |
| 五、道綱母歌の構造 38                     |    |
| 六、作品形成との関わり 42                   |    |
| 第三章 鳴滝籠りの引歌表現群——下巻への転回点として——     | 45 |
| 一、各巻の引歌表現 45                     |    |
| 二、恋を表象する引歌 46                    |    |
| 三、待つ心をあらわす引歌 49                  |    |
| 四、うち消される引歌 55                    |    |
| 五、〈鳴滝籠り以後〉へ 56                   |    |

第四章 鳴滝籠り後の歌語表現の変化——帰宅時の「撫子」・「呉竹」と「つゆばかり」から——……………63

一、帰宅記事の問題性 63 二、「撫子」の表現 64 三、「呉竹」の表現 68

四、帰宅時の「撫子」と「呉竹」71 五、和歌的表現との距離 73 六、作中道綱母の対象化へ 78

II 作為的表現世界と「書く」こと……………81

第五章 唐崎祓いの構造——仮構の明るさと独詠歌——……………85

- 一、兼家の途絶えと活気に満ちた旅 85 二、諧謔・屏風歌・同行者による逃避世界の構築 87
- 三、「ひぐらし」の歌の現実認識 91 四、現実との向かい合い 95

第六章 上巻における「をば」——身内の喪失と関わって——……………99

- 一、「をば」の存在 99 二、〈母の死〉における「をば」 99 三、〈姉との離別〉における「をば」 104
- 四、「をば」の役割 107 五、上巻の「をば」の存在意義 109

第七章 鳴滝籠りににおける「をば」——守護的存在として——……………112

- 一、上巻の「をば」112 二、「をば」の来訪と帰京 113 三、鳴滝籠りににおける「をば」 117
- 四、他作品の「をば」121 五、『蜻蛉日記』の「をば」123

第八章 下巻冒頭部の兼家訪問記事について——「聞く」こと・「見る」こととつくられた時空——……………126

- 一、〈養女迎え〉はどう導かれるか 126 二、一月末の兼家の訪問と「聞くゆ」126
- 三、明けて二月一日の雨と「見る」こと 129 四、兼家が去って「見る」前栽の景 131
- 五、聴覚と視覚と 134 六、次の記事での反転 135 七、次なる「見る」もの 138 八、下巻全体の読みへ 140

第九章 下巻における漢文的表現——兼家との関係の相対化へ——……………144

- 一、漢文的表現からの下巻論の試み 144 二、類出する漢詩文表現と漢文日記的表現 145
- 三、漢文的表現の意味 152 四、下巻における位置づけ 155

第十章 作為的表現の意義……………161

- 一、「日記と虚構」の問題 161 二、登場人物と情景描写・文体 163 三、作為的な表現と「書く」ということ 165

III 「書く」という語と作品形成……………169

第十一章 『蜻蛉日記』成立の基底——「書く」という語の分析から——……………173

- 一、「書く」の用例数 173 二、他者と関わり合う「書く」175 三、重ねられる「書く」と蜘蛛の「かく」糸 178
- 四、「書く」・「記す」と『蜻蛉日記』182 五、日記文学と「書く」こと 186

第十二章 『蜻蛉日記』と「とよかけ」——序文の「書く」に着目して——……………191

- 一、「書く」と序文 191 二、「土佐日記」との関係 192 三、私家集との関係 194
- 四、「とよかけ」との近さ 199 五、『蜻蛉日記』の成立 201

第十三章 上巻前半部の成立考——章明親王からの贈歌をめくって——……………207

- 一、上巻前半部と後半部 207 二、撫子の歌の類似 208 三、千鳥の歌の類似 211
- 四、兼家と上巻前半部 215 五、道綱母の「書く」意欲 219

第十四章 私家集を内包する『蜻蛉日記』——和歌より二字下げ表記の存在——……………222

## 第一章 〈父の離京〉における贈答歌

——和歌の齟齬と散文表現——

### 一、〈父の離京〉と散文表現

『蜻蛉日記』の始発は「私家集的発想を基本」としたものであると木村正中氏が説いて以来、この作品の特に上巻前半部は和歌の要素の強い私家集的なものと考えられている。本章では、和歌の世界からどのような契機を得て散文の表現世界がつかみ取られたのか、その経緯を本文に即して探ってみたい。作品冒頭の、和歌を中心とした私家集的な色合いが濃いついわれる部分から変化して、豊かな散文表現をつかみはじめるとなっている箇所<sup>(1)</sup>に眼を向け、どのような感情や状況がこの作品を散文世界へ押し出したのか検討していく。

上巻天曆八年冬の、父倫寧が陸奥守として赴任するために京を離れる記事に注目する。「蜻蛉日記注解」(以下「注解」とする)では、この部分を「和歌を中心としたこれまでの叙述とは異なる、密度の濃い印象的な散文」<sup>(2)</sup>であるとし、宮崎莊平氏は、「父の旅立ちの条あたりからはみずからの散文表現による自己表出の方途を見出して、以後独自の世界をくりひろげる」と述べている。論者もこの〈父の離京〉を、和歌から散文へと大きな飛躍を見せた最初の場面であると考える。

まず、本文の該当部分を引用する。

……わが頼もしき人、陸奥国へ出で立ちぬ。時はいとあはれなるほどなり、人はまだ見馴るといふべきほどにもあらず、みゆるごとに、たださしぐめるにのみあり、いと心ほそく悲しきこと、ものに似ず。みる人も、いとあはれに、忘るまじきさまにのみ語らふめれど、人のこころはそれにしたがふべきかは、と思へば、ただひとへに悲しう心ほそきことをのみ思ふ。いまはとて、みな出で立つ日になりて、ゆく人も、せきあへぬまであり、とまる人、はたまいていふかたなく悲しきに、「時たがひぬる」といふまでも、え出でやらず、かたへなる硯に文をおしまきてうち入れて、又ほろほろとうち泣きて出でぬ。しばしは見むこころもなし。見出ではてぬるに、ためらひて、寄りて、なにごとぞと見れば、

君をのみ頼むたびなる心にはゆくすゑ遠くおもほゆるかな

とぞある。みるべき人みよとなめりとさへ思ふに、いみじう悲しうて、ありつるやうに置きて、とばかりあるほどにもものしためり。目も見合せず思ひいりてあれば、「などか。世の常のことにこそあれ。いとかうしもあるは、我を頼まぬなめり」などもあへしらひ、硯なる文を見つけて、「あはれ」といひて、門出のところに、

われをのみ頼むといへばゆくすゑの松の契りも来てこそは見ぬ

となん。かくて、日のふるままに、旅の空を思ひやるこころ、いとあはれなるに、人の心もいと頼もしげには見えずなんありける。

確かにこの条は、これ以前に比べ散文章量がかなり増加しているといえる。さらに質を見ても、これ以前では散文はほとんど和歌をめぐる状況説明の役割程度しか有しておらず、持続し発展してゆく表現世界を構成すべき散文自体の力は非常に弱かったのに対し、この部分の散文表現は、質・量ともにそれ以前を大きく越えている<sup>(4)</sup>。「注解」ではこの部分を、「兼家との生活の実情をわが身の上として書くという蜻蛉日記の主題からけつして外れたものでなく、むしろかかる主題に直接つながる最も大切な場面の一つである」と述べており、父との別れを記すことがこの作品にとつ